就学に向けた取り組みについて

著者名：大阪市更生療育センター　保育士　　塩谷 菜月
保育士　　河村 直美
言語聴覚士　山岸 直美
児童指導員　櫻井 愛江

キーワード：親子通園、就学、コミュニケーション、多職種

要　旨

令和 5 年 8 月から 12 月まで、大阪市更生療育センターにおいて、就学に向けた支援を行うグループ（以下、「ひまわりグループ」）を設け、保育士・言語聴覚士・児童指導員で取り組んだ。この「ひまわりグループ」は親子通園に在籍する年長児を対象とし、就学に向けて保護者の関心が高かったコミュニケーションに着目したプログラムを設定した。その中で、子どもたちの相手への気づきや注目を高め、自分の気持ちや考えを発信する機会を設けて就学に向けたコミュニケーションの土台作りを促すとともに、保護者に対して子どもと関わる上でのヒントを得られる場を作ることを目的とした。その活動を通して、相手を待つ場面や子どもからの発信が増えるなどの変化が見られた。さらに各回の始めに、保護者と情報や支援方法を共有することで共通理解が深まり活動に生かすことが出来た。以下に、「ひまわりグループ」の特色や内容等についてまとめたものを報告する。

1　はじめに

大阪市更生療育センターの療育部門の通園事業の一つとして、親子通園がある。親子通園は、親子で療育に参加し、安心した環境の中で遊びを楽しむことが出来る、親子とスタッフが同じ場面を共有することで子どもの育ちをともに考えることが出来る等の特徴がある。親子通園に在籍する年長児の保護者を対象に、就学に向けて子どものことや日常生活で気になること・不安なことについて、アンケート（表 1）を実施した。

表 1　就学に関するアンケート

就学に関するアンケート
日常生活の中で気になることや不安なことについて当てはまるものに〇をつけてください。
①　文字の読み
②　文字の書き
③　数の理解
④　道具の操作・扱い方
⑤　他者との関わり・コミュニケーション
⑥　生活リズム
⑦　食事
⑧　排泄
⑨　更衣動作
⑩　登下校
⑪　学校とのやりとり
⑫　放課後や長期休みの過ごし方
⑬　その他

集計した結果、「②文字の書き」が 16%、「⑤他者との関わり・コミュニケーション」が 16%と最も多く、次いで「⑬その他」が 13%となった。その他の意見には、ルールの理解、朝の準備、おむつ、自傷行為などが挙げられた。アンケートの結果に基づき、中でも意見が多かった「⑤他者との関わり・コミュニケーション」に着目し、少人数グループで就学に向けた支援を行うため、5 回のプログラムを設定し、「ひまわりグループ」として活動を行った。

2　ひまわりグループの目的

・子どもたちの相手への気づきや注目を高め、自分の気持ちや考えを発信する機会を設けて就学に向けたコミュニケーションの土台作りを促す。

・保護者にとって子どもと関わる上でのヒントを得られる場を作る。

3　ひまわりグループの実施期間及び構成

令和 5 年 8 月から 12 月までの 5 か月間、月 1 回 50 分の 5 回コースで実施。クラス構成は、希望者の年長児 3 名と 4 名の 2 グループで実施した。スタッフは、保育士、言語聴覚士、児童指導員からなる。

4　ひまわりグループのプログラム内容

「ひまわりグループ」の主な活動内容と流れは以下の通りである（表 2）。他者との関わりの中で、「こんな伝え方をしたらいいんだ！」という子ども

自身の気づきや、「こんなふうにサポートしたらいいんだ！」という保護者にとってヒントを得られる場を設定した。また、各回の初めに言語聴覚士による活動のポイントの説明・保護者向けに支援方法の確認を行うことで、スタッフと保護者間の共通理解を深めていった。最終回には、各回で録画していたグループの様子を保護者と一緒に確認し、振り返る場を設けた。

表 2　ひまわりグループの活動内容

自由遊び	絵本 お絵かき 迷路 間違い探し
始まりの会	挨拶 出席確認 今日のスケジュール確認
設定遊び	①　何の音かな？(第 1,3 回目で実施) 何かな？(第 2,4,5 回目で実施) ②　自己紹介をしてみよう(第 1 回目で実施) ③　どんな気持ちか考えてみよう(第 2 回目で実施) ④　それぞれの考えを伝えあおう(第 3 回目で実施) ⑤　ミニゲーム（ボール運び）(第 1,2,3 回目で実施) ⑥　一緒に遊んでみよう(第 4 回目で実施) 遊びを広げてみよう(第 5 回目で実施)
終わりの会	水分補給 まとめ・振り返り 挨拶

5　活動の内容とねらい・保護者支援について

「ひまわりグループ」の活動の中で、設定遊びについての内容を枠内に、ねらいを枠外に示す。

(1)　設定遊び①：何の音かな？何かな？＜写真 1＞

子どもたちの前で実物やシンボルを少し見せたり、隠れたところで身近な物の音を鳴らしたりして、何かを当てる遊び。

《ねらい》

・見る・注目する、聞く力を身につけていく。
・自分の意見を発表する。
・他者の意見を聞く（耳を傾ける）。
・他者が発表している間待つ。
・答えがわかってもすぐ言わない（行動のコントロール）。

保護者との確認事項

・子どもの自発性を尊重し、大人からの指示は控える。
・子どもが困っている時は、大人が黒子のようになって小声でささやく。子どもにとって、注意された感がなく、気づくことが出来る。
・他者の様子やリーダーが提示するシンボルなどが見やすいように机の位置を工夫した。
・答えを言わずに挙手する時に、その動作を口頭の説明だけでなくイラストの提示を加えたり、なぜそうするのかの理由を伝えたりして、子どもたちにとってよりわかりやすい説明を行う。また、子どもたちが出来た時に出来たことをフィードバックすることを心がける。

写真 1：何の音かな？

（子どもたちから音を鳴らしているものが見えない状態で何の音か当ててもらう。ヒントになるように、選択肢のイラストを前に貼っておく。）

(2)　設定遊び②：自己紹介をしてみよう

＜写真 2.3＞

初めに好きな色、果物、おかしなどの項目を設定したシートを配り、選択肢を用いて自己紹介シートを作成する。作成できたら順番に自分の名前とサイコロを振って出た項目についてみんなの前で発表する。

《ねらい》

・発表の練習。
・他者への関心を高める。
・他者の発表を聞く。
・自分を知る。
・共通した話題でやりとりする場を作る。

保護者との確認事項

・今後、自己紹介の機会が増えるため、自分のことを伝える練習を行う。

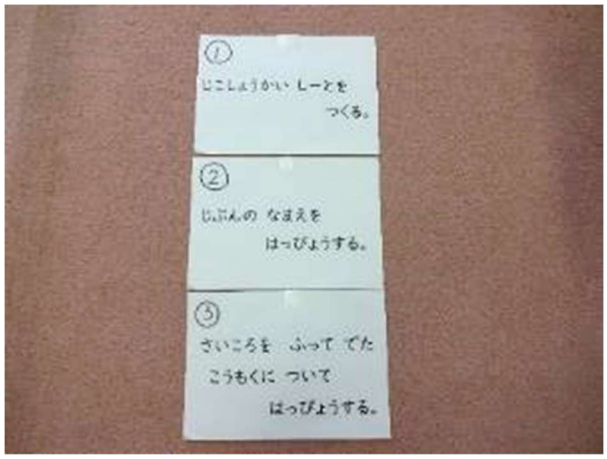

写真 2：自己紹介の流れ

写真 3：自己紹介のシート

（好きな色などそれぞれの項目についてあてはまるものを選んで作成する。）

(3) 設定遊び③：どんな気持ちか考えてみよう

＜写真 4＞

日常生活の一場面を例に挙げ、イラストを見ながら“こんな時どうする？”を考える。

《ねらい》

・絵を見てそれぞれの場面を想定して、自分だったらどうするかを考える。

・自分の考えを発表する。

・他者の意見を聞く、他者の考えに触れる。

・意見のやり取りの場を作る。

保護者との確認事項

・子どものモデルになる。

（例：「ママだったら雑巾で拭きます」「困った時はママを呼んでくれたら嬉しいな」）

→子どもが失敗せず、いろいろなアイデアを学ぶことが出来る。

写真 4：牛乳が床にこぼれたイラストを見せて、子どもたちに意見を尋ねている様子

(4) 設定遊び④：それぞれの考えを伝えあおう

＜写真 5.6＞

イラストを見て、気づいたことを自分の言葉で表現する。

《ねらい》

・“こんな時どうする？”のねらいに加えて、絵を見てわかることを文章で表現する。（例：「青い洋服を着た男の子がブランコに乗っている。」など）。

保護者との確認事項

・アイデアが出てこなければ、「赤い洋服の子、何を見ているのかな？」など注目するポイントのヒントを出す。

写真 5：提示された絵を見て、そこからわかる事柄を親子で確認している様子

写真 6：保護者と確認した内容を、前に出て発表している様子

写真 7：子どもチームがボールを運んでいる様子

(5) 設定遊び⑤：ミニゲーム（ボール運び）

＜写真 7.8.9＞

制限時間内に、ボールを運んで色分けしていく。大人チームと子どもチームに分かれて行う。最後に何個運ぶことが出来たかを確認する。

《ねらい》

・仲間意識を持ち、他者と一緒に同じ遊びを楽しむ。
・目標を持ち、達成感を味わう。
・より良い方法を求めて他者と話し合い、アイデアを出し合って協力する。
・自分たちのグループを意識しながら取り組む（大人対子ども）。

保護者との確認事項

・大人チームも楽しんで、遊びを盛り上げよう。
・みんなで目的を達成しよう。
・どうやったらより良くなるか一緒に考えよう。
・子どもからアイデアが浮かばない時、状況が読めていない時、裏の意図がわかりにくい時、前提がわかりにくい時に＜ト書き発言＞を用いる。ト書き発言とは、話題の前提や文脈、心情などを説明することである。自由な遊びや会話の中で、相手の意図を読みながら臨機応変に行動したり発言したりすることは難しい。ト書き発言を使うことで、子どもが相手にわかるように伝えたり、遊びを展開したりすることを支援していく。
・大人が意図的に間違えたり負けたりする場面を設け、そのような時に次どうしたら良いかなどのモデルを示していく。
・子どもたち同士のやりとりが広がるように、大人が間に入ってお互いの気持ちを代弁したり、子どもからの発信の内容を他者に説明したり、そこから他者への投げかけを行うようにする。

写真 8：子どもチームが運んだボールの数を数えている様子

写真 9：子どもチームが大人チームに勝って喜んでいる様子

(6) 設定遊び⑥：一緒に遊んでみよう
遊びを広げてみよう＜写真 10. 11＞

ヒントパズルを使って封筒を見つけ、その中にあるパズルのピースを合わせると答えがわかる宝探し。他者と一緒に答えを見つけ出していく。

《ねらい》
・ルールを聞く、理解する。
・手順に沿って宝を見つける。
・宝を見つけるまでの過程で他者と交わる、協力する。

保護者との確認事項
・友達とやりとりのチャンスを作る。
・他者に質問したり自分の意見を言ったり、手伝ってもらうことを要求したりする場面を大人が意図的に設け、子どもたちにモデルを示していく。

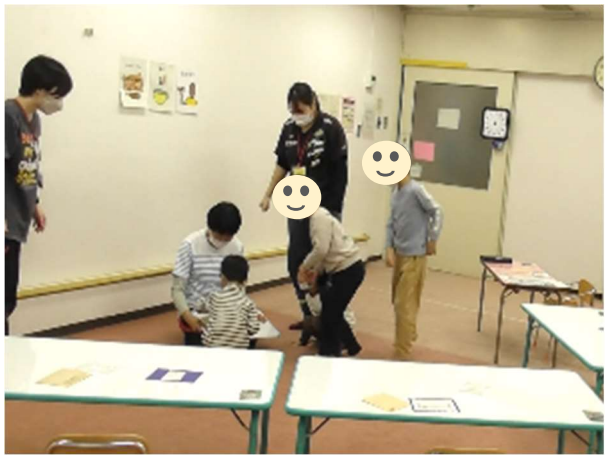

写真 10：それぞれに見つけたパーツを組み合わせて宝が何かを確かめている様子

写真 11：パズルを完成させて宝がわかり、喜んでいる様子

6 保護者へのアンケート実施とその内容について

「ひまわりグループ」最終回終了後に保護者にアンケートを実施した。その項目と回答内容、まとめについては以下の通りである（回答内容を枠内に示す）。

(1) アンケート内容

質問①：時間(50 分)について＜図 1＞

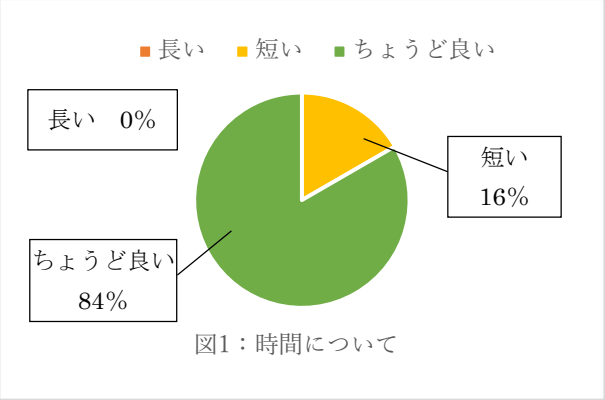

図1：時間について

質問②：回数(5 回)について＜図 2＞

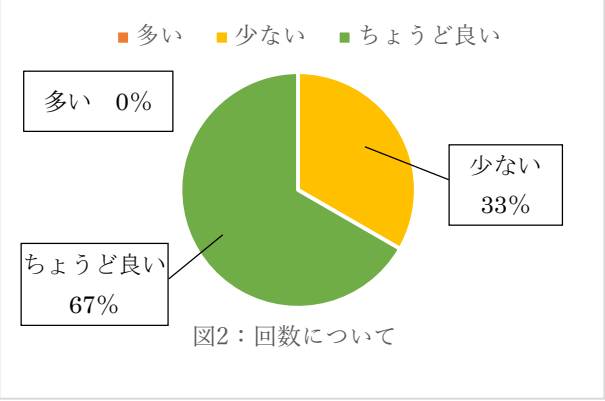

図2：回数について

質問③：人数(3～4 人設定でスタート)について＜図 3＞

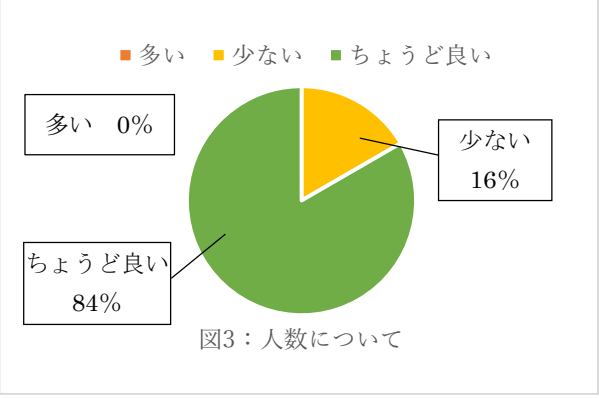

図3：人数について

質問④：テーマ（特にコミュニケーションに着目したグループ）について＜図 4＞

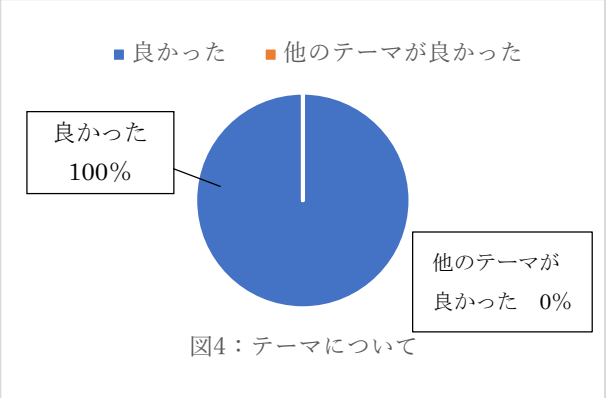

図4：テーマについて

質問⑤：活動内容について＜図 5＞

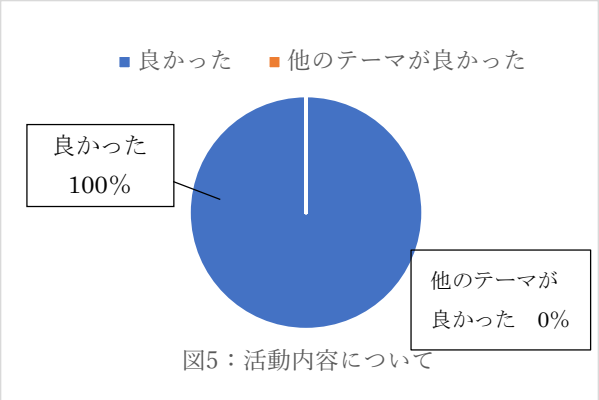

図5：活動内容について

質問⑥：お子さんの様子について、変化が見られたことや良かったこと

- 発表をする、想像する、解説するという所が良かったです。
- 新しい環境に接することが出来て良かった。
- お友達の答えを聞いて自分の答えを変えてしまう、これはお友達の話を聞いていないと出来ないことだと思いました。お友達の提案にも乗っかることが出来たこともあったので◎でした。
- “手を挙げてからお話をする”というルールがあることを知れたようです。
- お友達が話す時は自分は話すのを止めることも、他のお友達がそうする様子を見て、理解していたように思います。
- 普段なかなか待つことや我慢することが苦手なのですが、この活動を通して少し待つことや自分が手を挙げたけど、他のお友達が当たって我慢する、という状況を体験出来て良かったです。
- 困った時に「どうするの？」と聞くようになりました。

質問⑦：お子さんの様子について、難しかったこと

- 発表したいけど、待つということ。でも「ちょっと待ってね」と言われると出来ていたと思う。
- その環境にドキドキした気持ちが芽生えるのは良かったが、少しネガティブになる心もありました。
- クラスの時からですけど、手を挙げて自分が当てられるまでに喋ってしまう。（以前よりはましだと思いますが）
- 10 月の「ひまわりグループ」であった発表が、行事の前後で集中が切れやすい時期だったのと、興味が持ちづらかったのもあり、「しんどかった」と言っていました。でもお友達が話す時は静かにしていて驚きました。
- みんなの前でプリントに書かれていることを説明する（誰が何をしているという内容のプリント）ということが、あまり理解できずに難しそうでした。

質問⑧：保護者の方について、変化が見られたことや良かったこと

- 子どものそばで、こんなこともできるんだと見れたこと。
- 先生との対話、指導が勉強になった。録画したものを見返すと、冷静・客観的に見れて、「ああ、こうすれば、こう言えば良かった」と復習できて良かったです。
- ビデオを録っていてくださったので、子どもたちが大人をよく見ていることがわかりました。お手本になれるように気を付けないといけないですね。
- 家の中だけではなかなか経験しにくいこと（手を挙げる、他者の話を聞く）を就学前に経験できて良かったです。過去の経験の反復で自信を持てる部分もあると思うので、練習の機会を一緒に経験できて良かったです。
- 本人にとってやりすぎないサポートの仕方を学べて良かったです。
- 子どもが困っている時にかける言葉がわからなかったのですが、少し出来るようになったかなと思います。

質問⑨：保護者の方について、難しかったこと

- 普段からですけど、声掛けがやっぱり難しいなと思いました。
- もう少しボールをたくさん入れたかったです。意外と難しいものですね！
- 声のかけ方。本人にとってちょうど良い声のかけ方やタイミングが難しいなと思いました。

質問⑩：その他（感想や質問）

- 自宅では実際に出来ない学習が多く、ありがたいクラスでした。もっと多く参加のタイミングがあると嬉しかった。
- ビデオを録って、あとから親も確認してみるのは良いなと思いました。ただ最終回だけだったので、前半・後半に分けて（例えば 1,2 回目の確認として 3 回目にビデオを見る）すると私たち親もまだ記憶が新しいのでわかりやすいかもしれません。トータルの回数を増やさないと厳しいと思いますが、、。
- 親子通園に参加を希望したきっかけの一つが小学校ですることの練習をする機会を持たせてあげることだったので、ひまわりグループにも参加させていただけてとても良かったです。手を挙げて発言したり、相手の発表を静かに聞いたりすることを経験できて、これからの自信につながると思っています。また、ボール入れで“勝ち負け”があることにも挑戦できました。最近は、もう一回がある、もう一回したら良い、と少しずつ柔和に考えている姿も見られています。「ひまわりグループ」での経験も糧になっていると思います。
- 小学校に向けて、コミュニケーションに着目した活動に参加でき良かったです。
- 親も子どもと学習できたことが良かったです。

(2) アンケートのまとめ

「ひまわりグループ」の時間や回数、人数設定については、ちょうど良いという意見が多かった。しかし、少人数のグループの設定した為、欠席が入った時にさらに人数が少なくなってしまうので、子ども同士でのやりとりの練習の機会が減ってしまうグループもあったことに対しては残念な意見もあった。

また、毎回ビデオで活動の様子を録画しており、最終回で見ながら振り返る時間を設けたことに対しても、良かったという意見が多かった。さらに、振り返りの頻度を上げると次回の子どもへの対応に生かすことが出来て良いのでは、という意見もあった。

内容は、子どもにとってどうだったかと保護者にとってどうだったかの意見を集めた。子どもについては、就学に向けて実際に学校で経験すること（手を挙げて発言する、他者とやりとりをする中で相手の状況や意見を知る）を事前に経験できたことが良かったという意見が多かった。その中でも子どもによっては難しい部分もあり、それぞれの課題が再確認できたという意見があった。保護者については、子どもの姿を近くで見ることで、どのような時に困るのか、どのようなサポートをしたらうまくいくのかを学ぶことが出来た、という意見が多かった。実際にサポートをすることで、子どもによって声掛けのタイミングは様々な為、タイミングを合わせることが難しかったという意見もあった。

7　まとめ

今回約半年間、親子通園に在籍する年長児を対象とし、就学に向けてのコミュニケーションに着目した「ひまわりグループ」を設けた。

まず初めに就学前に経験しておきたいこととして、「他者と関わることの楽しさ」「他者のことを知りたい・応じたい」「他者に伝えたい・話したい」「成功体験・失敗しても大丈夫な体験」の四点を挙げた。

保護者へは、「ひまわりグループ」の中での支援者の役割として、「さりげなく気づかせる」「モデルを示す」という二点をお願いした。

就学に向けたプログラムとして、様々な活動を設定したが、就学後に経験するであろうことを遊びの中に混ぜて、楽しく参加できるよう工夫を行った。

実際に、全 5 回の中で子どもたちの様子には様々な変化が見られた。

発表する時につい答えを言ってしまうことが多かったが、第 3 回目以降は、ルールの提示の仕方をより視覚的に工夫したり、子どもが出来た時にその状況をフィードバックしたりすることで、答えを言わずに挙手出来たり、他者の発表の間待つことが出来たりする場面も見られるようになってきた。

また、子どもたち同士や大人とのやり取りの中で、他者の発言に耳を傾ける様子が増えた。活動の中では、自分から発信したり他者からの問いかけに答えたり、他者の発言を受けての発信をするなど、他者とのコミュニケーションの機会が増えた。さらに、通常のクラスでもそのような場面が増えてきた。

また、思うようにいかない時に上手く言葉で伝えることが出来なかったり、タイミングが合わなかったりで、活動への参加が難しい場面もあったが、そのような時はお互いの気持ちを大人が代弁し、どのように解決していったら良いかを考える場としてきた。

今回の「ひまわりグループ」では、就学をテーマにしたプログラムを設定したことで、どんなことをこれから経験するのかを事前に知ることができ、子どもにとって安心して就学に向けての準備をする手助けに少しは繋がったのではないかと考える。また保護者にとっても、これから子どもが困った時に

どのような支援をすれば円滑に進むのかを、一緒に療育に参加することで知るきっかけになったのではないかと思われる。

これらのことから、他者との関わりの中での子ども自身の気づきや、保護者にとってヒントを得られる場として、「ひまわりグループ」の取り組みは成果があったのではないかと考えられる。今後もこの取り組みでの成果や保護者の意見を取り入れて生かしていきたい。

8　おわりに

今回、「ひまわりグループ」についてまとめる機会を得て、多職種（今回は保育士、言語聴覚士、児童指導員）で取り組む支援の良さや、就学に向けたコミュニケーションというようなテーマに絞ったプログラムを設定するメリットを改めて認識することが出来た。

今後もそれぞれの親子の生活に寄り添い、課題に合わせた環境調整や支援方法などについて保護者と一緒に検討、試行していくような療育支援を目指していきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、ひまわりグループの子どもたちと保護者の方々には多大なご理解とご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

参考文献

1) 安住ゆう子・三島節子：教室・家庭で今すぐ使える SST,株式会社かもがわ出版,京都府,2009
2) 岡田智・愛下啓恵・安田悟：社会性・情緒・セルフコントロールを育む！幼児と小学校低学年のソーシャルスキル～就学前・就学後のアセスメントと活動アイデア,明治図書出版株式会社,東京都,2021
3) 綿野香・鳥居千登勢・小山久実：言語聴覚士が作った思わず話したくなるイラスト BOOK～ことば･コミュニケーションを育む～,株式会社三輪書店,東京都,2021
4) 竹田契一（監修）・里見恵子・河内清美他：実践インリアル･アプローチ事例集,日本文化科学社,東京都,2005